様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2013
課題番号：２５５６０３２０

研究課題名（和文）地域スポーツの社会的価値に関する質的研究

研究課題名（英文）The qualitative study on the social value of community sports

研究代表者
高岡　敦史（Takaoka, Atsushi）

岡山大学・その他部局等・助教

研究者番号：６０５５０２９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　300,000円、（間接経費）　90,000円

研究成果の概要（和文）：地域スポーツクラブ会員および非会員の地域住民が構成している社会的ネットワークを把握し，地域スポーツクラブを結節点にした社会的ネットワークを，従前からの地域生活のネットワークとの重複性に着目して，その固有性を理解した．
その結果，地域スポーツクラブ固有のネットワークは，行政区画を超えて拡がるところに特徴があり，地域スポーツクラブを結節点にした生活圏内のネットワークは，地域生活のネットワークと重複していることが明らかとなった．
発見事実から，地域スポーツの社会的価値は，生活圏を超えるネットワークを構成することと，諸々の地域生活のネットワークが重なり合う受け皿になることと理解された．

研究成果の概要（英文）：This study was to understand the uniqueness of the social network to understand the social network of members and non-social network of members of the community sports club, was in the node community sports club.
As a result, the network specific, there is a feature where you spread beyond the administrative boundaries, the network of life within which the node a local sports club, that it overlaps the network of community life is evident in community sports club it became.
From the findings of these, the social value of community sports, and have the ability to configure the network of more than living area, be a place where network of community life of various overlap revealed.

研究分野：複合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学　スポーツ科学

キーワード：地域スポーツ　社会的ネットワーク

科学研究費助成事業　研究成果報告書

１．研究開始当初の背景

「豊かなスポーツライフにどのような価値があるのか？」という問いは，自然科学と社会科学の両面から多様にアプローチされてきた．自然科学研究（生理学的研究，心理学的研究など）は，定期的・効果的な運動継続の身体的・精神的効果を明らかにしてきた．また，本研究が位置付く社会科学領域では，スポーツの価値そのものを問う研究をのぞいて，スポーツの社会的価値を理解しようとしてきた．それらの研究では，スポーツ実践頻度やスポーツ実践の機会や場への接近行動からスポーツライフの豊かさを同定し，スポーツ実践に対する動機づけやスポーツや生活に対する意識や価値観等との関係性を明らかにしようとしてきた．

これまでのスポーツの身体的・精神的価値や社会的価値の捉え方は，統計学的な手法によるものがほとんどであった．これらはスポーツの諸価値を俯瞰的・構造的に同定することはできたが，生活者の文脈を捨象してしまうという欠点があった．本研究は，特に社会的価値について，生活者の意味世界から捉えようとする質的研究を試みるものである．

総合型地域スポーツクラブ政策以後の地域スポーツをめぐる研究は，量的方法・質的方法に関わらず，スポーツ実践や地域スポーツクラブの経営状況と生活者（クラブ会員）のスポーツや地域生活への意識との関係性を捉えようとしてきた．しかし，それらはいずれも要素還元主義的な立場に立つものである．本研究では，地域スポーツをめぐる生活者の意味世界は，要素に還元できるものではないという認識から，正統の質的方法で展開しようとするものである．

コミュニティ・スポーツ論を含む地域スポーツに関する議論は，鈴木(1986)や，園部(1984)による論説を受ける形で展開された松村(1993)によるコミュニティ・スポーツ論批判がすべての発端となっている．

松村は，地域社会や生活の構造的変化，市町村合併等による地域社会の枠組みの変化においては，地域住民を中心に据えた生活空間における共同性の確認と，そこに位置付くスポーツ活動の実態を実証的に明らかにしなければならないという指摘をしている．（松村,1993,p.179）そして，地域スポーツ研究の方向性について「日々の暮らしの中で人と人が互いに存在を必要とし，何らかの関係性を自ら創り上げている事実の確認」と「それら関係性の消失に伴う住民自身による新たな模索のプロセスの実証」が必要であると指摘している．（松村,1993,pp.176-177）

松村に拠れば，今日まで展開されてきた地域スポーツをめぐる議論は，地域におけるスポーツ実践者の捉え方に関する議論であったと言える．すなわちスポーツ実践者をスポーツ欲求に突き動かされる個人と捉えるか，あるいは地域で生き暮らしてきた生活者と捉えるか，の議論である．松村論説以後の地域スポーツ研究は，生活者の論理からスポーツ実践を理解しようとするものが立て続けに展開されている．柳沢(2006)や関根ほか(2009)，後藤(2011)などはその一端である．

本研究はこの到達点に立って行われなければならない．このことに加えて，農村社会学者の恩田(2006)が指摘する，近代化によって不安定化した日本の村落の自生的社会秩序が，一定のルールを遵守する相互の信頼関係のネットワークによって維持されてきたことに着目する必要があるだろう．この認識に立脚したとき，総合型クラブの創設・育成支援等の地域スポーツ振興が地域社会を再生すると手放しで期待することは難しいと言えるだろう．恩田の言葉を借りれば，「国家や地方自治体あるいは企業がセイフテ

ィ・ネットの役割を担う傾向が強まるとき，地域社会自らの『助力』のあり方を真剣に考えるべきである」（恩田,2006,p.439）と言わねばならない．

地域スポーツの社会的価値を理解しようとする本研究は，地域生活の文脈を構成する主体としての生活者の視点に立ち，制度としての総合型クラブではなく，生活者が構築している社会的ネットワークとして総合型クラブを捉える必要があるのである．

２．研究の目的

本研究は「地域スポーツの社会的価値とは何か？」という最終的な問いに答えるための研究の端緒として，以下の 2 点を明らかにすることを目的とする．

(1)地域スポーツをめぐって生活者が構成している社会的ネットワークはどのようなもので，それは地域内の他の社会的ネットワークとどのように関連しているか．

(2)地域スポーツをめぐる社会的ネットワークへの帰属は，生活者の生活にどのような影響を及ぼしているか．

３．研究の方法

本研究の２つの目的を達成するためには，地域スポーツの情況と，スポーツをめぐって構成されている社会的ネットワーク，そして地域内の他の社会的ネットワークを理解する必要がある．それらのネットワークの有り様は生活者の地域生活の営みのひとつの表出であり，生活者によるスポーツや生活への意味づけを反映したものである．生活者の意味世界から地域スポーツの社会的価値を理解することが本研究の挑戦性の核であるが，本研究では社会的価値をネットワークの有り様から理解しようとするものである．

本研究は，年間を通じた高頻度の参与観察と多数の生活者へのインタビューを行い，スポーツライフと地域生活，社会的ネットワークに関する語りを分析した．

参与観察とインタビューという調査手法は，調査対象地域に多くの時間身を置き，生活者の語りにじっくりと耳を傾けなければならない．そのため，研究代表者が頻繁にアクセス可能な地域を選定する必要があった．そこで，地域スポーツ活動が一定程度展開されている岡山県内（研究代表者の所属機関の所在県）の市町村を選定する必要がある．本研究では，岡山県総社市（人口 67,707 人・平成 24 年 9 月末日現在）清音地区（旧清音村）において活発に活動する総合型地域スポーツクラブ「きよねスポーツくらぶ」（以下，KSC とする）を対象とした．清音地区は伝統的な地域行事も残存しており，総社市内の他地区と比べて住民間のつながりも密である．（KSC 会長，理事長ほか多数の調査対象者による語り）

参与観察は，2013 年度中に KSC 主催で行われたスポーツ・文化活動関連の教室やイベント計 12 件の活動場面で行った．インタビューは，KSC 関係者だけでなく，教室・イベント参加者や企画・運営に関わっていたメンバー計 15 名を皮切りにした雪だるま式サンプリングによって行った．雪だるま式サンプリングによって KSC 非会員を含む社会的ネットワークを把握することができるとともに，それらの人間関係を聴き取ることができた．最終的にインタビュー対象者は 53 名になった．

４．研究成果

KSC を媒介とした会員のネットワーク（以下，KSC 会員ネットワークとする）は，清音地区で密ではあったものの，清音地区外の他市にまで拡がっていた．一方で，地域活動のネットワーク（以下，地域活動ネットワーク

とする）は，清音地区を中心に総社市内に収まるものであった．

また，KSC 会員ネットワークは，多様な他の地域活動ネットワーク（小学校 PTA ネットワーク，社会福祉協議会ネットワーク，消防団ネットワーク，趣味活動ネットワーク，ママ友ネットワークなど）と重複していた．KSC 会員ネットワークに含まれる地域活動ネットワークは多種多様であり，ひとりがいくつもの地域活動ネットワークに所属していることも確認された．

複数の地域活動ネットワークをつなぐ結節点になっている人物は，KSC 会員ネットワークを通じて清音地区・総社市外のつながりも持っており，「他の団体の活動の様子を聴いたり」，「清音以外の地区の話を聴くと自分たちの良さやダメなところが分かる」（いずれもインタビュー対象者談）と述べるように，地域活動に関する視野を拡げていた．

これらの社会的ネットワークの情況は，地域スポーツをめぐって構成される社会的ネットワークが，地域生活のネットワークを含み込んでいるものの，地域内のつながりを地域外のネットワークにつなげる（ブリッジする）可能性を含んでいると考えられる．すなわち，地域スポーツは地域内ネットワークの「広場」になるとともに，地域外の情報を地域生活のネットワークに取り込むためのブリッジとゲートの機能を有することが示唆された．

これまで，スポーツによるコミュニティ再生の可能性について議論が展開されてきている．その到達点は，スポーツの力だけでコミュニティが再生されるのではなく，スポーツを通じて醸成された連帯意識が他の生活局面に拡大・波及したり，あるいは生活のつながりがスポーツを通してより密になったり拡がったりすることが必要であるという認識にある．しかし，それらの論説は実証されていない．本研究は，スポーツには多様な生活のつながりを内包しうる可能性があることと，そのつながりに新たな知を取り込みうる可能性があることを実証した．この成果は，今後の地域スポーツ振興のビジョンと方策を導くための一助となるだろう．

しかしながら，本研究はケーススタディであり，仮説としての可能性を示したに過ぎない．今後は，ネットワーク研究の知見を取り入れた大規模な実証研究が求められるだろう．

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計２件）

<u>高岡敦史</u>「地域スポーツ環境の豊かさを規定する要因の検討」日本体育学会体育経営管理専門領域月例会，2014 年 2 月 22 日，筑波大学

常浦光希・<u>高岡敦史</u>「運動・スポーツ生活成立の条件に関する研究」日本体育・スポーツ経営学会，2014 年 3 月 21 日，新潟医療福祉大学

６．研究組織

(1)研究代表者

高岡敦史（TAKAOKA ATSUSHI）
岡山大学・スポーツ教育センター・助教
研究者番号：60550291